

の及ぶべきにあらず、何方にも再嫁して身をたてば、幼きものの為にもよからんと懇に諭しけれど、つな肯はず、一たび夫婦となりし身の、夫の病重きを見て出ゆくべき理りなし、其上二親と夫の飢に及び給わんこと浅間しく、二人の幼き者のゆくゆく人となりなば、かかる苦はあるまじければ、心づよく思いたまへと慰め、さらに家を出る心なし。されば舅姑もあわれをかけ、実子よりも親しかりしとぞ。享保十九年（一七三四）つな及び安左エ門を賞して共に米を与えり。忠義者はつ、此村の農民左兵エ妻なり。宝曆二年（一七五二）米を与て賞せり。

二八、柏原村

1、神明神社由来 柏原という村の名が示すように、旧鶴沼川扇状地の中州の雑木林を開拓してきた村である。村東を、旧河筋を追うて通じている思い堀が流れている。古くはこの村端れまで現在の大川の洪水の氾濫が押しよせたことがあるか知れない。その低い崖に臨んで、村東に神明神社の境内の森がある。四周を土堤で石垣で積みあげているのが、氾濫地の神社境内の様相を示している。

もとの柏原の鎮守は伊勢宮とある。本郷町の宗像出雲が司っていた。神明はその伊勢神明という意味である。寄せ宮、相殿にして柏原に下米塚・上米塚・新在家・松野・中新田を併せた六カ村からいろいろの神が合祀されてきた。下米塚と下米塚新田から明神二座がきているが、神明といい、明神といい、霊験あらたかなただ有難い神様という意味で祭ったのかも知れない。家の神、屋敷神には、稲荷神社などともに多く祭られている。

ここにやはり下米塚村より移したという腰王神というのがある。越しの神と同じ、阿賀野川流域、最上川流域などに多くみられる神で、会津でも喜多方市の腰王神社を筆頭にして、東山その他に見受けるが、阿賀野川に沿うてのほり、次は大川に沿うて下米塚までたどりついた、裏日本系統の信仰のはいつてきた匂いがする。こしは